

マレーシアの大学で日本語を学ぶ大学生が持つ日本企業への就職のイメージ ー異文化間で働くことに対する認識に関するインタビュー調査ー

How Malaysian University Students View Working at Japanese Companies: Insights from Interviews
on Attitudes toward Working Interculturally

大津友美(東京外国語大学)・佐藤曜子(元東京外国語大学)

研究の目的と背景

日系企業の海外進出増加に伴い、現地で日本語を用いて業務が行える従業員の需要が高まっている。特に、日本語能力の高い大卒者には日本と現地とをつなぐ「架け橋人材」としての貢献が求められることが多い。海外顧客への営業、海外現地従業員の教育や管理等といった役割を担ってもらうことで、日本企業は新たな顧客や労働者に近接できる。そのような背景の下、日本語を学習するマレーシアの大学生は、日本企業でのキャリアや架け橋人材として働くこと、日本人と共に働くことについてどのようなイメージを持っているのであろうか。本研究の目的は、学生たちが日本企業への就職に対して持つイメージを明らかにすることである。

研究の内容

4年生7名に対して、半構造化インタビューを実施した。インタビュー分析の結果、学生たちは(1)日本語が使える仕事を望んではいるが業種等のイメージは漠然としている、(2) 架け橋人材となることに対して価値を見出せていない、(3)敬語知識の不足を実際に職場で求められている以上に不安に感じているものの、(4)実際の職場コミュニケーションでは大学で学んだ日本語の技術が生かせそうだという見通しを持てていることがわかった。